

グレアム・プリースト著、久木田水生・藤川直也訳
『存在しないものに向かって』（勁草書房、2011年刊）

「非存在対象（non-existent objects）」を認める立場としては、20世紀への世紀転換期オーストリアの哲学者マイノングが有名であり、それゆえこの種の立場はしばしばマイノング主義と呼ばれる。英語圏でも1980年前後にこの種の立場を擁護する研究が相次いで出版された。オーストラリアの論理学者・哲学者リチャード・ラウトリー（後にシルヴァンに改姓）による *Exploring Meinong's Jungle and Beyond* (1980) はその一つである（ジャングルの写真とエッシャーの絵が表紙にあしらわれた、この分厚い本の威容をご記憶の読者もおられるだろう）。本書はそのラウトリーの共同研究者であった論理学者・哲学者グレアム・プリーストが、マイノング主義の一変種——ラウトリーにならって“noneism”（「非存在主義」という訳語が当てられている）と呼ばれる——についての独自の議論を展開した、2005年の著作の邦訳である。

本書の記述は非常に平易である。また、ほとんどすべての論点が量化（多重）様相論理を応用した独自の形式的枠組みの中で形式化されており、主張内容は明確である（この形式的道具立ては独自ではあるが直観的に分かり易く、説明も非常に丁寧である）。さらに訳者解説は、プリーストの枠組みを認識論理一般の中に位置づけ、非存在主義をマイノング主義一般の中に位置づけつつ手際よく解説した充実したものであり、これを読むだけでも非存在主義の概略をつかむことができる。マイノング主義という一見近寄り難い哲学的立場が、このように接近しやすい形で読めるのは喜ばしいことである。マイノング主義は近年フィクション論に応用されるなど、少なくとも無視できない一つの立場となっていることから考えても、本書は大変有意義だと言える。

本書は二部構成となっており、第一部が非存在主義の立場の説明、第二部が非存在主義の立場に対する批判の検討と、いくつかの分野への応用に当てられている。本書の非存在対象の理論は志向的文脈の分析と密接な関連を持っており、まず第一章・第二章ではプリーストによる志向的文脈の分析の枠組みが提示され、その枠組みを用いて第三章・第四章で非存在主義者の基本的な考え方が説明される。第五章はラッセルやクワインによるマイノング主義への批判に対する応答である。第六章はフィクション論への非存在主義の応用、第七章は数学の哲学および様相の形而上学への応用を論じている。第八章はある種の意味論的パラドクスに対して非存在主義者がどう応答すべきかを考察している。哲学書にはありがちなことだが、第一部の説明は第二部、特に第六章・第七章における応用や批判への応答を通じて細部が明確化され、補完されることになる。なお、第三章の付録にはビュリダンやオッカムら中世の哲学者による志向的文脈の理論についてのサーベイが、第六章の付録にはプリースト作の短編小説（！）「シルヴァンの箱」が収録されている。

さて、マイノングはしばしば、「ペガサスやシャーロック・ホームズは存在する（exist）わけではないが、（何らかの意味で）ある（there is）、ないし存立する（subsist）」といったことを主張したと考えられてきた。しかしこれは誤解であり、マイノング自身を含めマイノング主義者の多くは、ペガサスやシャーロック・ホームズのような非存在対象は、いかなる意味でもありはしないと主張している（第五章ではこの点に注意することにより、ラッセルやクワインに見られるマイノング批判のいくつかが退けられる）。

他方でプリーストの提示する意味論において、非存在対象は量化領域に含まれており、その意味ではやはり非存在対象は「ある意味存在する」と考えられているようにも見える。これに対しプリーストは、量子化は「存在中立的」であり、いわゆる「存在」量化は「 $A(x)$ を満たす x が存在する」ではなく「ある x について $A(x)$ 」と読むべきだと言い、誤解を避けるために“ $\exists x.A(x)$ ”と表記を変えることさしている（p. 14）。しかし重要なのは、非存在対象に対する量化を認めるために、本書は非存在対象の同一性と性質、およびある非存在対象が対象として認められるための規準（「存在規準」と言うてはならない！）について、かなり実質的な理論を組み立てているということである。大まかに言うと対象として認められるための規準を与える鍵とな

るのが「特徴づけ原理」、同一性規準を与える鍵となるのが「自由の原理」である（本書第四章で主に論じられている）。紙幅の都合上、以下では「特徴づけ原理」に的を絞って議論を紹介する（プリースト自身が自らのオリジナリティとして誇るのがこの原理である）。

「任意の性質 $A(x)$ によって、ある対象 c_A を特徴づけることができ、 $A(c_A)$ が成立する」というのが「素朴な形式の特徴づけ原理」である（p. 110）。この原理は通常の記述句に関する事実を、記述される対象が現実には存在しない（表示に失敗している）ようなケースにまで拡張したものと見ることができる。この素朴な形式の特徴づけ原理を無制限に受け入れることはできない。例えば任意の文 A について、“ $x = x \wedge A$ ” ($\equiv B(x)$) にこの特徴づけ原理を適用することができたとすれば、“ $c_B = c_B \wedge A$ ” ($\equiv B(c_B)$) が示せるが、ここからは A が帰結する。すなわち任意の文 A が証明できてしまう (ibid.)。

マイノング以来多くの論者は、特徴づけ原理において用いられる「性質」の範囲を限定することによってこの問題に対処しようとしてきた。しかしこのような限定を恣意的でない仕方で与えるのは難しい。そこでプリーストは別の仕方で特徴づけ原理を修正する。すなわち、任意の性質 $A(x)$ によってある対象 c_A が特徴づけられることを無制限に認める代わりに、 $A(c_A)$ が成立するのは必ずしも現実世界でなくてよいとする。つまり、われわれがある対象をその性質によって特徴づけるとき、われわれはその特徴づけを、ある特定の仕方で何らかの世界を「描写する (represent)」という文脈で行っている。そして、 $A(c_A)$ が成立するのはその描写された世界（描写されたことが成り立っている世界）においてである、とするのである（p. 111）。これがプリースト独自のアイデアであり、彼自身このアプローチに気づくことによって初めて非存在主義にひきつけられたと述べている（p. viii）。

評者の理解した限りでももう少し具体的に述べるとこういうことである。プリーストによれば、例えばホームズの物語によって描写される世界というものがあり、バルカン理論によって描写されている世界というものがある。ただし一般に描写というものは多くの点で不完全なので、描写された世界は複数ある。そこで、ホームズの物語のような、世界描写を行う仕方の各々が、可能世界意味論で言う「世界間の到達可能性関係」を与えていると考える。こう考えると、ホームズの物語においてある事実 A が成立するという主張は、ホームズの物語により到達可能な世界のすべてにおいて事実 A が成り立つということを主張していると考えられる。つまり、ある特定の仕方で世界描写をするにあたりある人 a が事実 A が成り立つと描写する、ということをも “ $a\Phi A$ ” と表し、この世界描写の仕方に対応する到達可能性関係を $R_{\Phi}^{\delta_s(a)}$ と置くと、“ $a\Phi A$ ” が現実世界 $@$ において真 $\Leftrightarrow @R_{\Phi}^{\delta_s(a)}w$ なるすべての世界 w について、 A は w において真」となる。これは Φ を一種の命題的態度とみなし、可能世界意味論を与えたことに相当する。

以上の用語を使うと、プリーストの特徴づけ原理が述べているのは、性質 $A(x)$ によって対象 c_A を特徴づける際、その会話の文脈から何らかの Φ 演算子が決まり、 $A(c_A)$ は成立しなくとも、 $a\Phi A(c_A)$ は成立する ($@R_{\Phi}^{\delta_s(a)}w$ なるすべての世界 w で $A(c_A)$ が成立する)、ということである。ある場合には $@R_{\Phi}^{\delta_s(a)}w$ なる世界 w に現実世界が含まれ、 c_A は現実の対象となる（通常の「表示に失敗していない」記述句についてはこうなる）が、別の場合には描写されるのは現実世界以外の様々な世界であり、 c_A は非存在対象であり、 $A(c_A)$ が成立するのはその世界においてである（p. 112）。

一見、こう考えても素朴な特徴づけ原理の問題は残るように見える。すなわち任意の文 A について、これが現実世界で成立することは示せないにしても、 $@R_{\Phi}^{\delta_s(a)}w$ なるすべての世界 w で成立することは依然認められねばならない。とりわけ A は矛盾を表現する文であるかもしれない。しかし通常の可能世界意味論では、矛盾する文はいかなる可能世界においても真にはならないのである。しかしプリーストは、通常の可能世界に加え「開世界 (open worlds)」なるものを考えて可能世界意味論を拡張する。通常の可能世界においては、複合文の真偽は部分文の真偽に依存して決定されるが、開世界においてはどの文も原子文と同様に扱われ、複合文

の真偽は部分文の真偽に依存せず与えられる。それゆえ、開世界では任意の文に任意の真理値を割り当てることできる。そして、 $@R_{\Phi}^{\delta_s(a)}w$ なる世界 w には、可能世界だけでなく、このような開世界も含まれるのである。

本書の枠組みは初めからこの開世界の概念を前提している。すなわち、第一章でプリーストは志向的態度一般の意味論を与えるのだが、その際それぞれの志向的態度によって「到達可能」な世界の内に開世界を含めるのである。これによって、志向的態度の間での推論はほとんど妥当でなくなってしまう（例えば「 $A \wedge B$ ということを知っている」から「 A ということを知っている」といった推論さえ妥当ではない）。しかし逆に、この種の意味論に対してよく指摘される、論理的全知の問題や論理的閉包の問題は免れることができる。プリーストはこの点を指摘して開世界の意味論を動機づけ、「一般的には志向的概念は実際、論理的に見て相当にアナキーなものである」（p. 29）と述べて開世界の意味論の破壊的な効果を受け入れるよう促している。

開世界の意味論が持つこの破壊的な効果は、少なくとも全面的には受け入れ難いものだと評者には思われる。実際、プリースト自身の志向的態度についての議論も、しばしば異なる志向的態度の間の論理的連関を前提しているように思われる。おそらく「アナキーな」意味論はあくまで出発点であり、これに制約を課すことによってより適切な志向的態度の意味論を与えることが見込まれているのだろう。しかしこのとき、特徴づけ原理の方はどうなるのだろうか。プリーストが特徴づけ原理に用いている「描写」の概念も、他の志向的態度同様に一定の論理に服すべきであるように思われる。しかし他方で、特徴づけ原理をあらゆる性質に対して適用できるという考えは、まさに開世界の「アナキーさ」に支えられているようにも思われる。この文脈で開世界の意味論にどのような制約を与えるのが適切かは全く明らかではない。

評者としてはここから、本書が提示する理論は未だ萌芽的なものに留まっていると結論づけておきたい。しかし、プリーストの特徴づけ原理において示されている、記述句の意味論に「世界の描写」という概念を用いるというアイデア、およびそれにより記述句の意味論を記述された対象の存在／非存在と独立に与える可能性は、更なる追究に値するものではないかと評者には思われた。

最後に、本書は極めて誤記の少ない本ではあるが、評者が気づいたものを二点指摘しておく。(1) p. 83 の最後の行、「 $\exists x.((Qx \vee a\Psi Qx) \vee aPx)$ 」は「 $\exists x.((Qx \vee a\Psi Qx) \wedge aPx)$ 」の誤り。(2) pp. 223-224 において、「 $\delta_{s(x/b)}(\epsilon yRxy) = \varphi\{a, c\} = \{a, c\}$ 」は「 $\delta_{s(x/b)}(\epsilon yRxy) = \varphi\{a, c\} \cup \varphi(D) = \{a, b, c\}$ 」とすべきである。なお $\delta_{s(x/a)}$ 、 $\delta_{s(x/c)}$ についても同様だが、これらの場合は $\varphi(D)$ を付け加えても値が変わらない。またいずれも証明の正しさには影響しない。（本書評の草稿に対し有益なコメントをくださった植村玄輝氏と野矢茂樹氏に感謝する。）

(山田竹志)